

中学校国語科における〈古典〉学習の可能性 —2012年度から2014年度までの実践を振り返って—

井上 泰

学習指導要領に「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」が設けられて以降、〈古典〉学習をめぐる様々な議論がなされ実践が報告されている。それらの多くは、〈古典〉をア priori に価値があるものとし、日本の伝統文化を“教える”ために〈古典〉教育を行うべきだと考えているように思われる。しかし、〈古典〉とはその時代に生きる人々が意味を見出すからこそ〈古典〉として生き続ける。そのように考えた場合、〈古典〉にア priori に価値を認めて、〈古典〉学習を構想するのは妥当でない。では、中学校国語科においてどのように〈古典〉学習を考えていくことができるのか。3年間の実践を振り返りつつ、〈古典〉学習の可能性について考えてきたい。

1. はじめに

中学校国語科において〈古典〉学習は、どう在ることができるのか—この問いを本論の中心に据えるのは、学習指導要領に「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」が設けられて以降、〈古典〉学習をめぐる様々な議論や実践が報告されるなかで、それらの多くに疑問を感じているからである。その疑問とは、何のために〈古典〉を扱うのかということである。管見の限りにおいて、多くの議論や実践が、〈古典〉をア priori に価値があるものとし、日本の伝統文化を“教える”ために〈古典〉教育を行うべきだと考えているように思われる。しかしながら、いうまでもなく古典はカノンではない¹。小峯和明氏は、「古典とは常に発見と復活、蘇生をくり返す、それ自体、ひとつの運動体のようなもの」²と述べているが、稿者はその〈古典〉観に賛成である。さて、このように〈古典〉を考えるならば、〈古典〉を伝統文化を“教える”ものとして扱うのは適切でない。益田勝実氏は、「それが古典でありうるかどうかは、現代に生きるわたしたちが、それをどのような形で必要とするかの問題であり、たんに古いから古典なのではない。そういうふうには〈古典概念〉をはっきりさせていくと、古典を用いての教育は、古典の字句の教育にとどまってはならず、現代人としてそこからなにを汲み上げるか、ということを先に立てたものでなければならないことが、明確になって来るであろう。」(傍線は引用者)と述べている。「現代に生きる」学習者が〈古典〉から「なにを汲み上げるか」。それをナショナルリズムの観点からではなく、学習者の側から考え、学習者の〈生〉と関わるものとして〈古典〉学習を準備していくことが必要だろう。以上が稿者の近年の〈古典〉学習についての主な疑問や考えである³。

ただし、議論や実践のなかには疑問を感じるものばか

りではない。例えば、高校での〈古典〉学習への提言ではあるが、岡田真由氏は、「高校の入口から出口までの3年間で生徒達が会える教材をしっかりと選び、どの時期に、どういった『問い』をめぐる場を設定していくかが重要になってくるだろう。」と述べ、『竹取物語』の実践を報告している⁴。また、信木伸一氏、渡辺春美氏、富安慎吾氏は、学習者の関心のある問題を調査から明らかにし、また〈古典〉テキストの開く問題領域を分析した上で、学習者の関心のある問題とテキストの開く問題領域との接点を考えた単元を提案している⁵。いずれも、学習者の認識世界と〈古典〉テキストの「問い」・「問題領域」とがどのような接点をもつのかということ〈古典〉学習構想の出発点としている。

さて、稿者も学習者と〈古典〉との接点を考えて、2012年度中学1年生、2013年度中学2年生、2014年度中学3年生の3年間、〈古典〉学習を行ってきた。実際には思うようにいかなかった点もある。そうした反省も含めて3年間の実践を振り返りつつ、中学校国語科における古典学習はどう在ることができるのかを考えていきたい。

2. 2012年度の実践を振り返る

2012年度は、中学1年生の国語を週3時間担当した。中学1年生ということで、読みの構えを育成することを目標として、年間の授業を行った。読みの構えとは、テキストを読解した後で、テキストの「問いかけ」を引き受けつつ、テキストの問いに対する答えである「呼びかけ」と対話して、自己の認識を深化拡充していくという態度のことである。〈古典〉学習もその目標のもと構想した。

(単元のねらい)

学習者と〈古典〉とのよりよい出会いをめざして単元を構想した。ここでの「〈古典〉との出会い」というの

は、〈古典〉を読むことを通じて、〈古典〉の向こう側に、人間の生をめぐる問題を「問い」それへの応答を「呼びかけ」ている古人を感じ取ることで、そして学習者がテキストの「問いかけ」を引き受け、「呼びかけ」と対話しながら「問い」への思索を深めていくこと、こうした一連の出来事のことをいう。

(教材選択の意図)

『竹取物語』を教材として選んだ。『竹取物語』の語り手は、理想の世界として天上を語る一方で、翁とかぐや姫の親子のあり方、また帝とかぐや姫の男女のあり方を問題として語っている。そして、翁とかぐや姫の親子関係、帝とかぐや姫の男女関係、それぞれの関係に見られる情愛のあり方を、その具体的なかたちとして読者に提示している。こうした人間の〈生〉をめぐる根源的な「問いかけ」と「呼びかけ」を読み取ることができる『竹取物語』は、上述した「〈古典〉との出会い」をよりよいものにできるだろうと考えた。

(単元計画・全20時間)

単元計画は以下の通りである。『竹取物語』の一部分を抜粋して教材化するのではなく、物語全体を扱った。場面は次の①から⑩までのように区切った。本文は原文に現代語訳を付けたり、傍訳を付けたりして作成した。ただし、読解していく上で、考えさせたい箇所については、原文だけで提示した。授業では、平安貴族の政治や生活、風習などの知識を与えつつ、登場人物の心情や行動の理由などを読解した。

- ①かぐや姫の発見と成長 ②五人の貴公子の求婚
- ③かぐや姫の難題 ④帝の求婚に応じないかぐや姫
- ⑤帝、狩りをよそおい翁邸へ行く ⑥かぐや姫の嘆き
- ⑦月からの迎え ⑧かぐや姫の天昇 ⑨残された帝と翁
- ⑩江戸時代に制作された『竹取物語』の挿絵を読み解く

また授業では、読解後に「まとめ」を書かせたり、「不死の薬を燃やした帝と薬を飲まなかった翁をどう思うか」など、物語の内容について考える問いを提示し考えさせた。そうした学習を経てまとめとして、「『竹取物語』の語り手の意図(読者へのメッセージ)は何だろうか? これまで学習してきたことと最後の場面を踏まえて考えてみよう。」という課題を提示し、記述させた。次にいくつか引用したい。

- ①話の途中、いろいろあったけれども、最も印象に残っているのはやはり、かぐや姫が月に帰るところ。感情がなく、年もとらない“理想郷”と、感情があり、老いてゆく“きたなき所”。一見“理想郷”、月がよく思われるが、果たして本当にそうだろうか。その疑問を語り手は投げかけているように感じた。そしてそれを、かぐや姫や翁、帝などの行動から考えさせようとしているのだと思う。

かぐや姫が地上にいる間にとった行動について、だんだんと変化していることが分かる。

私が思ったのは「感情」があるからこそ、成長できたり「老いる」からこそ今を大切にできたりするので「月」が良いとはいちがいには言えないということ。

- ②語り手は「現実」を読者に伝えようとしたと思う。最後の最後まで理想郷としてえがいてきた天の世界をラストシーンになって、ひそかに否定的にかいていると思う。翁と姫がかなしみにかられる中、天の住人らはみな平然とし、むしろ“はやくしてくれ、”というかんじだった。人間界ではそれを「冷めている」と言い表わすだろう。語り手は直接的に「天はああだ、こうだ」と否定していないものの、感情のない天の世界は人間界にいる私たち読者から客観的に見られるから、それを利用して読者を翁と姫に同情させている。今までは地上は「きたなき所」、天は「理想郷」であったものをクライマックスになって感情がないことのみしさを描き、どちらにせよ、そこまで良い所ではない、ということを伝えようとしている気がする。「どちらにせよ、それほど良い所ではない。」ということこそが、「リアル」であり、「現実」である。さらに、この物語を読んだ人たちが、地上(人間界)のよさ(つまり、感情をもつことのあたたかさ)を実感し、真の理想とはなにか、改めて考えなおす機会にしようとしたのでは(作者が)ないかと思う。固定観念を払いおとするための物語だったかな? と思う。

- ③帝は美しい物や人を手にいれたいという欲があり、翁はかぐや姫の結婚(一門の繁栄・権力・財産)を利用しようとしていたように、人間は権力や欲を求めますが、結局は生き甲斐を失った人間にとっては何の意味もないということを伝えたかったのだと思う。

帝や翁がかぐや姫がいなくなった後、食べ物も食わず遊びもせず悲しみたおれ、欲深い人が欲しがるといふような不死の薬もいらぬと言ふ。

生き甲斐が人間にとってこれほどまで大事なのかということを伝えようとしていたと思う。反対に言えば、生き甲斐があればありあまる欲は必要ないのかもしれないと思います。

- ④竹取物語は、愛情とは何かという読者へのメッセージがあるものだと思う。かぐや姫を一門の繁栄のために、本当に愛しているかわからない五人の貴公子にとつがせるのが愛か、天皇にとつがせて、かぐや姫が裕福にくらせるようにするのが愛かなどの親子関係の愛または男女関係の愛とは何かという本であると思う。最終的には天皇は手紙と一緒にかぐや姫の気持ち(薬)を燃やし、かぐや姫に愛を伝え、翁と姫は、かぐや姫がいなければ生きていても意味がないという、人生そのもの

のかぐや姫に注ぐような形の愛でしめした。ぼくは、
どちらの愛も文の中にでてきた他の愛と違い本物の誠
意のこもった愛だと思ふ。

学習者は、語り手の語りに注目しながら(波線部)、「感情」, 「現実」, 「生き甲斐」, 「愛情」などの言葉(傍線部)で『竹取物語』のメッセージ(この言い方には、「問いかけ」と「呼びかけ」を含めて使っている)を考えている。『竹取物語』から人間の〈生〉をめぐる根源的な「問い」を見出しているといえるだろう。そしてその「問い」に対して、テキストの「呼びかけ」と対話しながら自分の考えを書いている(二重傍線部)。また、年度末に1年間の振り返りとして、学習者に「興味深かった学習は何ですか。また、どの点が興味深かったですか。」と問い、記述させた。その中に次のような意見があった。

①私は、竹取物語が一番印象的です。古文だから、興味を持っていたのもあるけど、日本の童話「かぐや姫」の原作(??)が、人間の欲や愛について深く考えさせるような内容だとは思っていなかったからです。

②私は一番「竹取物語」が心に残っています。今までこういう昔の人が書いた文章は現代の言葉になおされたものを私は読んできました。だから竹取物語を読んだときはすごく新鮮な気持ちでした。竹取物語を読むことで、内容を知ることができるだけでなく、その書いた人の生活や考えを感じることができた点が特に心に残っています。

③私が興味深かったのは「竹取物語」である。「竹取物語」は平安時代に書かれたものだから、時代背景などは今とは異なるが、今生きている私達が読んででも理解でき、共感できる部分もある。人間の考えることはいつの時代も同じなのだということがわかった。

①の傍線部にあるように、学習者は『竹取物語』を人間の〈欲〉や〈愛情〉といった「問い」を「深く考えさせる」ものとして捉え、また②の傍線部にあるように、そうした「考えを感じることができた点」を評価している。さらに、③の傍線部にあるように、そのようなことを通して、〈古典〉テキストの向こう側に、自分たちと同じような「考える」「人間」を感じ取っている。以上のような意見から、単元の「ねらい」である「〈古典〉との出会い」を達成できたのではないかと思われる。

3. 2013年度の実践を振り返る

2013年度は、中学2年生の国語(古典分野)を週2時間担当した。12年度の「〈古典〉との出会い」をどう拡充させていくかを考えながら、〈古典〉学習を構想した。昨年度同様、学習者の認識を深化拡充させるものを教材として選択し単元を構想するというを基本に、様々

な〈古典〉を読ませたいと考えた。一方で、テーマを問い深めるために〈現代文〉も扱った。以下、単元名と扱ったテキストを挙げる。

①単元名 **春と秋どちらが優れている?**

(テキスト) 『万葉集』巻第1・16, 『徒然草』第19段

和歌—『古今和歌集』

〈春〉巻第1春歌上, 巻第2春歌下より

- 1 4 「雪の」藤原高子 2 47 「散ると」素性法師
- 3 60 「みよし」紀友則 4 89 「桜花」紀貫之
- 5 129 「花散」清原深養父

〈秋〉巻第4秋歌上, 巻第5秋歌下より

- 1 169 「秋来」藤原敏行 2 198 読み人知らず「秋萩」
- 3 212 「秋風」藤原菅根 4 219 「妻恋」凡河内躬恒
- 5 310 「み山」藤原興風

俳句—与謝蕪村

〈春〉1 春の水すみれつばなをぬらしゆく

2 紅梅の落花燃らむ馬の糞

3 春の海終日のたりのたり哉

〈秋〉1 硝子の魚おどろきぬ今朝の秋

2 落穂拾ひ日あたる方へあゆみ行

3 猿どのの夜寒訪ゆく兔かな

漢詩

〈春〉1 「春暁」孟浩然 2 「春風」白居易

〈秋〉1 「秋風引」劉禹錫 2 「三五七言」李白

近現代詩

〈春〉1 たんぽぽ はるか「ねがいごと」

2 立原道造「春が来たなら花が咲いたら〜」

3 与謝野晶子「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」

4 森山 直太朗・御徒町凧「さくら(独唱)」

〈秋〉1 もみじ くみこ「もみじのワルツ」

2 ボードレール「じきに私たちは冷たい闇へと沈みこんでゆく〜」

3 与謝野晶子「金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に」

4 草野正宗「楓」

+ 学習者の好きな春と秋の詩を持参して紹介

現代文—短歌の作り方について

俵万智「三十一文字のパレット」(中公文庫, 1998)

②単元名 『論語』を読み、〈人生〉, 〈学〉・〈思〉・〈知〉, 〈他者〉について考える

(テキスト) 『論語』為政篇4・15・17, 衛霊公篇24, 『熊野観心十界図』, 加藤周一『学ぶこと思うこと』(岩波ブックレット, 2003)

③単元名 〈鬼〉について考える ※夏季補習

(テキスト) 『宇治拾遺物語』, 『百鬼夜行絵巻』など

④単元名 和歌を読もう, 和歌を作ってみよう—〈こと

ば) について考える

(テキスト)

語り手について 宮川健郎『物語もっと深読み教室』(岩波ジュニア新書 739, 2013)※夏課題

言葉について 1 長田弘「最初の質問」
2 鷲田清一「言葉のちぐはぐ」

和歌一詠歌主体について

- 1 素性法師「今こむと」百人一首 21 番
- 2 参議雅経「み吉野の」百人一首 94 番

和歌一歌枕(白河の関)について

- 1 能因「都をば」後拾遺集・羈旅・518
- 2 源頼政「都にはまだ」千載集・秋下・365
- 3 『十訓抄』「下・十ノ十」

和歌一歌ことば(有明の月)について

- 1 素性法師「今こむと」百人一首 21 番
- 2 壬生忠岑「有明の」百人一首 30 番
- 3 藤原俊成「忘るなよ」千載集・恋 3・839
- 4 後徳大寺左大臣「ほととぎす」百人一首 81 番
- 5 坂上是則「あさぼらけ」百人一首 31 番

⑤単元名 源平の争乱の歴史語り ※実習生担当

(テキスト) 1 覚一本『平家物語』「敦盛の最期」
2 延慶本『平家物語』「敦盛の最期」

⑥単元名 『徒然草』を読んで〈心〉について考える

(テキスト)『徒然草』109段・110段・89段・212段・53段・235段・序段, 原本住吉如慶筆飯塚円貞広美模写『徒然草絵巻』, 英一蝶筆『御室法師図』

以上が実際に行った単元名と扱ったテキストである。ここでは、「①単元名 春と秋どちらが優れている？」について詳しく述べたい。単元は、教科書「中学校1年生」(学校図書)所収「春秋の優劣—さまざまな古典」(227～228頁)を基として、〈春〉と〈秋〉をテーマとした和歌や俳句、漢詩や近現代詩を複数読むことで、〈春〉と〈秋〉のさまざまな捉え方や表現があることを知り、自己の〈春〉や〈秋〉の捉え方を振り返りつつ、それらを表現する(短歌)ことをねらいとした。授業は、一時間で一ジャンルを鑑賞。鑑賞の方法は、原文に現代語訳を付したものをプリントにし配布、各自好きなものを複数選んで鑑賞文を書く。次時に鑑賞文をプリントにまとめ、それをもとに全体で表現を読解。こうした授業を経て「まとめ」として学習者が書いた文章が次のものである。

①僕はやはり春の方が優れていると感じた。古代から現代へと様々な春を題材にした詩、歌などを読んで、気付いたことがあった。秋には哀しみや儚さといった性質を持っているが、対し、春は哀しみや切なさ、希望という、二つの面を持ち合わせているのだ。マイナスの面である切なさやプラスの面である希望が入り混じった春は哀しさのみを表している秋よりもより面白

く、良い季節だと思う。また、僕は今回の学習で読んだ詩の中では、白居易の「春風」が一番面白いと思った。宮中の色鮮やかなたくさんの花を農村の花や実などを開かせる春の良さ、美しさを表現しながら、最後の一行で社会構造に対する風刺を利かせている点に感動した。ただ単に春について考えを巡らすのではなく、別の方向からの考えを混ぜることにより、より味わい深い詩が出来上がるのだなと感じた。

②僕は秋の方が優れていると思う。秋の感慨深さ、悲しさにはなにか心揺さぶるものを感じる。でも、春のさわやかで透き通るようなものも捨て難いと思う。

この学習を通じて気付いたことは同じ「春・秋」でも「日本の一」「漢詩の一」ではだいぶ傾向が違った。まず日本だが、詩人の心に動きによるものが詩に映されていて、それによる比喩などもあり比較的読み解きやすかった。一方、漢詩にはストレートに情景をくつきりと映されていて、どちらかというと読者側に深く感じ考えさせる・問いかけるものが多かった。さらに後半で読んだ「ボードレール」では「もの悲しい、どこかさびしい」ではなく「激しい悲しさ、嘆き」が表現されていた。

傍線部にあるように、〈春〉や〈秋〉のさまざまな捉え方を読むことで学習者はそれらのよさを発見したり、自己の〈春〉や〈秋〉についての考えを深めたりしたようである。また、波線部にあるように、それぞれ表現の特徴やおもしろさにも気づけたようだ。そのことは年度末に行った1年間の振り返りからもうかがえる。

③いろんな事を自分の力で考えて表すことが多かったなあと思います。春秋の争いは特に楽しかったです。今まで、春と秋について考えた事は無かったです。春→花粉、秋→たべものくらいのイメージしか持っていませんでしたが、その季節だけの出来事や情景から語り手の心情となって和歌をつくることは楽しかったです。昔の人の言葉はなんか面白い所があって、例えば今では美しい物を表すのに「美しい」と一つにまとめがちな所をさまざまな言葉を重ねて「美しい」と表している所など…言葉の力を感じることができました。難しかったけれど楽しかったです。

また、2年生では〈古典〉と〈現代文〉とを関わらせて学習を構想した。そうした効果も次の学習者の1年間の振り返りから確認できる。

④「心」や「ことば」など形にできないもの、また、「鬼」などの一見形に表せそうなのに実はそうではないもの、現代文や古文など様々な文から、様々なことを学んだ。そして時代は違えど考えることは今も昔も同じなんだと感じた。

⑤二年生の学習の影響で色々なジャンルの本をよみたい

と思いました。

テーマを問い深めるために様々な〈古典〉を読み、また〈現代文〉も同時に扱うことで、あるテーマを昔も今も人間は考え続けていることに気づいたり、様々なジャンルの本を読みたいという読書の構えを養ったりすることができるだろう。以上が、2 学年の振り返りである。

4. 2014年度の実践を振り返る

2014年度は、中学3年生の国語を週3時間担当した。14年度は13年度よりも、より抽象的なテーマについて考えることができるように計画した。例えば、『遠野物語』の学習では、〈異界〉(他者)との向き合い方や〈現実〉の捉え方について、また曾我蕭白筆「虎溪三笑図」の学習では、観念(仏教画題)との向き合い方についてなどである。一方で、表現を読み解くことについても力を入れた。例えば、『おくのほそ道』をテキストが踏まえている和歌や漢詩、物語を読みつつ、『おくのほそ道』で表現されていることを読み解いた。このように14年度は、より抽象的なテーマを考え、また表現を読み解く力を高めることをねらいとして、〈古典〉学習を構想した。その中で報告したいのが、文語文法の学習である。

〈古典〉を自分で読み解くには、文語文法の知識が必要である。文語文法の学習は高校生で行うが、これまでの表現を読み解く学習の発展として、また高校への準備として学習を構想した。単元については次の通り。

単元名 助動詞や助詞に注目して和歌を読もう

文語文法の学習において用言を理解することは基本だが、文法を理解することの重要性は、助動詞や助詞の学習においてより一層感じられるように思われる。助動詞や助詞は、用言・体言にいろいろな意味を添えたり、意味と意味とを関係づけたりして文意を形成する。そこで、助動詞や助詞の働きを理解することで、文語文法を学ぶ意義を実感させ、学習の構えを作ろうと考えた。なお、本単元を行う前提として、口語文法の学習を終えていること、百人一首を覚えていることがある。

(単元計画・全6時間)

- 1 文語にも現代語と同じく文法があることを知る一助動詞「なりけり」の文法的な解釈を口語文法をもとに考える。
- 2 助動詞の役割について考える一文末が「なりけり」の百人一首32番・69番・82番・96番・100番の中から一つを選び詩の形にし、詠い手の心情を考える。その上で、「なりけり」を使うことの効果を考える。
- 3 助動詞の役割について考える一人一首94番の歌で、なぜ推定と考えられるかを考える。断定の場合の歌の内容と推定の場合の歌の内容とを考え(詠い手は

どんな人か、どこにいるか、何をしているか、どのような心情か)、助動詞の意味によって文脈が変わることを理解する。

- 4 助動詞についての理解を深める一同じ「過去」を表す「けり」と「き」との違い(間接体験に基づく過去か、直接体験に基づく過去か)を、百人一首9番・57番・73番・40番・41番を読み考える。現代語訳をしてしまえば同じ過去を表す言葉も、当時の人々にとっては意味の違いがあったことを知る。

- 5 係助詞の役割について理解する一係助詞「ぞ」「こそ」の働き(強意、逆接、疑問)について、百人一首83番、47番、41番、3番、18番から考える。

以上が単元の概要である。この学習については、「まとめ」等の学習者の記述がないため、具体的に検討できない。しかし、後で見るように、文語文法への学習者の反応が分かるものがあるのでそれを参考にしたい。

5. おわりに

紙面の都合上、詳細に論じていない点も多いが、以上が3年間の実践である。改めて振り返ると、学習者の段階的な認識世界の拡がりや深まりを念頭に置き、テキストの開く問題領域を分析した上で、学習者が〈古典〉からどのような意味を見出すかを想定しながら教材を選び、学習者の認識の深化拡充を目指して単元を構想した。一方で、歴史的仮名遣いなど〈古典〉を読むための基礎的な知識を与え、またテキストの語りを読みとくために〈語り手〉や〈詠い手〉という概念を教えつつそれらを用いてテキストを読み解いたり、テキストのプレテキストとの対話を読み解いたりしながら、さらには文語文法を学ばせながら、学習者が一人で〈古典〉を読み解けるようになることも目指してやってきた。

では、こうした〈古典〉学習を学習者はどのように評価しているのだろうか。2015年1月に3年間の振り返りをした。その際に、3年間の振り返って「古典の学習に興味は持てましたか。」というアンケートを実施した。結果は次の通りであった。

- | | | |
|-------------|-----|-----|
| 1 持てた | 9人 | 8% |
| 2 まあまあ持てた | 53人 | 47% |
| 3 どちらとも言えない | 29人 | 25% |
| 4 あまり持てなかった | 20人 | 18% |
| 5 持てなかった | 2人 | 2% |

1, 2の主な理由は、次のようなものであった。

- ・昔の人の考えを知ることができるから。
- ・昔の人の感性が豊かで、おもしろいから。
- ・今の考えや感性と比較するのがおもしろいから。
- ・ことばの意味を考えるのがおもしろいから。

- ・表現を読み解いたり、表現方法を知ったりするのがおもしろいから。
- ・内容、ストーリーがおもしろいから。
- ・歴史や文化、風習などを知ることができるから。

ここでは特に学習者が古人の「考え」や「感性」に興味をもっている点に注目したい。古人の「考え」や「感性」を知ることによって学習者には何が起こっていたのだろうか。「古典学習を通して、どのようなことを学びましたか。」の問いに対して、次のような意見があった。

- ①古典学習を通して、昔の人の考えを知ることができました。今、自分がもっている考えを昔の人ももっていたことが分かります、なんかわくわくしました。また、自分の考えを改めるきっかけにもなりました。
- ②昔の人はどのような事を体験し、考え、感じたかということについて考えた。そこから見えてくる現在の共通点、変わっていたものが分かった。だから古典の学習はより自分達のことを知ることに繋がると思える。
- ③古典では扱われた内容は、私たちが普段生きている日常とは少し違った出来事について伝えたものが多かったように思える。そこから、自分の固定観念の外に出て、新しい見方やとらえ方を学んだ。

傍線部にあるように、〈古典〉から読み取れる古人の「考え」や「感性」から自分との共通点や相違点を見つけ、そこから波線部にあるように、自分の見方・考え方を相対化し考え深めていく、そうしたことを学習者は経験したと考えられる。そして、そのような経験こそを学習者は、高く評価している。

一方で否定的な意見もあった。「2 まあまあ持てた」を選んだ理由に次のようなものがあった。

- ・読み込んでいけば内容は考えさせられるものが多くて興味深かったけれど、読んでいくのが難しく、その壁が大きかったから。

「内容は考えさせられるもの」で「興味深」いが、古語への抵抗を感じるという意見。こうした意見が否定的な意見の主なものであった。もちろん、次に挙げるように、文語文法そのものに興味を持った学習者もいるし、古語や文語文法を学ぶことで自分で古典を読めるようになりたいという学習者も少なくはなかった。

- ・筆者はビデオがない時代に思ったことを率直に残すために詠嘆などの助動詞をたくさん用いたのだと思った。
- ・古典文法は難しいのでしっかりと勉強してスラスラ読めるようになりたい。
- ・まだまだ意味がわからない言葉があつて、古典自体読むのは難しいけれど、これから勉強して訳がなくても読めるようになりたいと思った。

古語や文語文法を理解して〈古典〉を読むためには時間がかかる。そうした時間をかけていないことも問題のように思うが、より抵抗感をなくすために、もっと〈古典〉を読むことと古語や文語文法を理解することが結びついた学習を行うことも必要であった。今後の課題である。

- また「4」を選んだ理由には次のような意見もあった。
- ・今の言葉ではないものを学んでも使えない。
- ・何のためにやっているのか分からない。
- ・昔の人がどのようなことを感じていたかを知ることが興味をもてたが、それ以上に「この勉強は役に立つのか?」という思いが強かった。

傍線部に見られるように、実学こそを価値のあるものとする考え方が学習者にはあるようだ。こうした学習者に向けてどのように学習を行っていくかということも今後の課題だろう。

以上、学習者の〈古典〉学習への評価を見てきた。まだ十分に検討できていない点も多いが、学習者にとって〈古典〉学習が興味深いものになる理由の一つとして、認識世界の深化拡充がある。こうした学習者の経験を目指して、中学校国語科では〈古典〉学習を行っていくことができるだろう。課題は上述したものに加えて、小学校の〈古典〉学習とのつながりや中学生における段階的な認識世界の拡がりや深まりの具体的な把握など尽きない。今後もそうした課題と向き合いながら〈古典〉学習を行い、どうすれば〈古典〉学習が学習者にとってより意味のあるものとなるのか探っていきたい。

注)

- 1 ハルオ・シラネ編『創造された古典—カノン形成・国民国家・日本文学』(新曜社, 1999)を念頭に置く。
- 2 小峯和明「日本古典の誕生」(17頁。『日本文学史』, 吉川弘文館, 2014)
- 3 益田勝実「古典文学の教育」(241頁。『益田勝実の仕事(5)』, ちくま学芸文庫, 2006。初出1967年)
- 4 学校教育における〈古典〉学習の現状を整理、詳細に分析し、重要な問題を指摘しているものとして、井浪真吾「教室で創られる〈古典〉—国語教育誌の中の〈古典〉—」(48～64頁。『論叢 国語教育学』復刊第4号(通巻9号), 広島大学国語文化教育学講座, 2013)がある。
- 5 岡田真由「『知ること』から『考えること』への授業作り」(108～116頁。『国語教育研究』第55号, 広島大学国語教育会, 2014)
- 6 信木伸一, 渡辺春美, 富安慎吾「古典学習における主題単元のテーマの設定—『学習者にとっての問題調査』から—」, 第66回中国四国教育学会発表。